

漱石作品における「のだ」文の使われ方

—鷗外『青年』と比較して—

石 出 靖 雄

1. はじめに

「のだ」文についての文法的研究は進んでいるが、小説という文章中で「のだ」文がどのようなはたらきをしているかはそれほど注目されていない。管見では、文章論の立場から永野賢(1986)をはじめとした文章の統括の観点に立つ研究が見られる程度である。

小稿は、従来からの文法研究の観点からではなく、文章中でのはたらきに注目して「のだ」文を扱ったもので、小説作品において「のだ」文がどのようなはたらきをしているのか、特に漱石作品ではどのようになっているのか調査したものである。調査の中では、特に「のだ」文が何に対して「～のだ」といつているのかについて焦点をあててみた。

用例収集のための調査範囲は、局外の語り手⁽¹⁾が語る形式である夏目漱石『三四郎』と『それから』と『道草』、比較のための森鷗外『青年』の地の文全体である。夏目漱石のテキストはいずれも初版本とした。『青年』のテキストは鷗外全集(岩波書店1972刊)とした。但し、JIS規格外字については新字で代用した。

文末以外の「のだ」や、「んだ」などの話し言葉、「のだらう」などの推量用法、「のではない」などの否定用法の用例は対象としていない。この結果、『三四郎』26例、『それから』61例、

『道草』53例、『青年』168例の用例を得た。

2. 「のだ」文の特徴

「のだ」文は、「のだ」に前接する部分を受け手に認識させようという意識が働いている文といえる⁽²⁾。つまり、「のだ」に前接する部分を受け手に強調して提示するということである。そして、その「のだ」に前接する部分は、提示する素材となっている。次のようなモデルになる。

〈素材〉のだ。

素材というのは、表現主体の心的状態の発現ではなく、事象を示しているだけだということである。名詞述語文との違いは、「のだ」に前接する部分が活用する語であり、体言でないということである。

次に考えるべきなのは、何に対してその素材が提示されたのかということである。素材が提示されるのは、コンテキストの中に話題があり、その話題について言及するときである。ごく単純には、次ような形が想定できる。

「〈A〉は、〈素材〉のだ。」

素材が「〈素材〉のだ」という形式で提示されるということは、何かに対して提示されると考えるのが言語的直観としては当然である。何の話題もなく素材が「〈素材〉のだ」と提示されるのは不自然に感じられる。ここで話題とい

う語を使ったのは、主題というほど文法的にはっきり示すことができず、「〈A〉についていうと、〈素材〉のだ」といったようなものをさしているからである。

しかし、話題が必ず「〈A〉は」という形で示されるというわけでない。また、明示されないことも多い。それでは、話題というのは必須要素ではないとも考えられるが、コンテキストなしで「のだ」文は使用できないし、調査用例においてはどの「のだ」文にも話題を想定することができたので、小稿では必須要素と考えた。

話題というのは、「のだ」文の主体・主語にあたるものということではない。語り手が何を意識して「のだ」文を書いたのか、ということである。だからここでいう話題は「～は」という形で補えないことがよくあるのである。提示した素材の主体にあたる「～は」が「のだ」文の話題の場合もあるし、ほぼ同じ形式の「のだ」文であってもコンテキストによって話題が他に
ある場合もあるのである。

3. よく使われる形式

3.1 挿入的解説（話題が具体的な物・事）

(1) (『道草』二十九)

或日彼は其青年の一人に誘はれて、池の端を散歩した歸りに、広小路から切通しへ抜ける道を曲つた。彼等が新しく建てられた見番の前へ來た時、健三は不圖思ひ出したやうに青年の顔を見た。

彼の頭の中には自分と丸で縁故のない或女の事が閃いた。**【1】** 其女は昔芸者をしてゐた頃人を殺した罪で、二十年餘りも牢屋の中で暗い月日を送つた後、漸と世の中へ

顔を出す事が出来るやうになつたのである。

「嘸辛いだらう」

容色を生命とする女の身になつたら、殆ど堪へられない淋しみが其處にあるに違ないと健三は考へた。然しいくらでも春が永く自分の前に續いてゐるとしか思はない件の青年には、彼の言葉が何程の効果にもならなかつた。此青年はまだ二十三四であつた。

(*下線・波線は石出、波線は「のだ」文の話題。)

【1】の「のだ」文は、「其女」が「昔芸者をしてゐた頃人を殺した罪で、二十年餘りも牢屋の中で暗い月日を送つた後、漸と世の中へ顔を出す事が出来るやうになつた」という素材を提示している。その話題にあたるもの、つまり何に対して素材を提示したのかということ、常識的に「其女」といえるであろう。「其女」という語は、素材の中に含まれ、「～になつた」という素材の内容の主体にあたるが、同時に「～になつたのである」という提示に対する話題となっている。前文の「或女」という部分を受けて「其女」とし、それを話題にしているのである。したがって話題は前の「或女」ということになる。

そして、この用例のように、具体的な物・人が提示の話題になつた場合には、その提示の文がその物・人の解説になっていると理解される。「〈モノ〉は、〈素材〉のである」というように、その人・物の性質・特徴・由来などが示されるのである。またこのような具体的な物・事が話題の場合、**【1】**のように、その解説が後の文まで長く続かずに文脈は元の流れに戻るこ

とが多い。そのため、この「のだ」文は、一時的な解説挿入のはたらきを担う場合が多い。この用例の「のだ」文の場合は、「女」についての挿入的解説で、この「女」を受け手に認識させようとしている。

また、この「のだ」文の話題である「其女」には「その」という指示語がついていて、前文との関係が明確になっている。このことによって、前文に出てきた「女」が次の「のだ」文の話題になっていることの指標になっている。殊に、この用例の場合は、「其女」の「女」は前文のくりかえしであるので、よりはっきりしている。

3.2 前文の内容を発展させる

(2) (『それから』一)

(門野は代助の家の書生。)

「何だか明日にも危しくなりさうですな。どうも先生見みた様に身體を気にしちや一、仕舞には本當の病氣に取付かれるかも知れませんよ」

「もう病氣ですよ」

門野は只へえ、と云つた限、代助の光澤の好い顔色や肉の豊かな肩のあたりを羽織の上から眺めてゐる。代助はこんな場合になると何時でも此青年を氣の毒に思ふ。【2】代助から見ると、此青年の頭は、牛の脳味噌で一杯詰まつてゐるとしか考へられないのである。話をすると、平民の通る大通を半町位しか付いて來ない。たまに横町へでも曲ると、すぐ迷兒になつて仕舞ふ。論理の地盤を豎に切り下げた坑道などへは、てんから足も踏み込めない。彼の神経系に至つては猶更粗末である。

【2】では、「代助から見ると、此青年の頭は、牛の脳味噌で一杯詰まつてゐるとしか考へられない」という素材を提示している。この【2】の「のだ」文の話題は何か、つまり「く～考へられない」のである」は何に對して提示されたのか。これは、前文の「代助はこんな場合になると何時でも此青年を氣の毒に思ふ。」である。この場合、「くA」は、く素材」のだ」という形にきれいにはあてはまらないが、「く～考へられない」のである」というように素材が提示されたのは、前文に對してであることは理解されよう。単純に形式化すると「くA」に對して、く素材」のだ」というような形になっている。

この用例では、「のだ」文の話題は前文全体であり、【1】のように前文の一部を問題にしているわけではない。前文全体を話題にしているので、一部分についての挿入的説明ではない。前文を発展させてその内容を受け手に認識させようとしているのである。旧來の説明を用いると、この「のだ」文は前文の事情説明をしている、ともいえる。このタイプの「のだ」文は非常に多く、典型的な使われ方の「のだ」文である。

3.3 話題の範囲が広い

(3) (『道草』六十七)

愕然として仮寝の夢から覚めた時、矢はれた時間を取り返さなければならないといふ感じが一層強く彼を刺戟した。彼は遂に机の前を離れる事が出来なくなつた。括り付けられた人のやうに書齋に凝としてゐた。【3】彼の良心はいくら勉強が出来なくつても、いくら愚圖々々してゐても、左右いふ風に凝と坐つてゐると彼に命令するの

である。

【3】では、「彼の良心」が「いくら勉強が出来なくつても、いくら愚圖々々してゐても、左右いふ風に凝と坐つてゐると彼に命令する」という素材を「～のだ」と提示している。その提示は何に対してなされたのかというと、直前の2つの文だと考えられる。やや長い内容があるまとまりとしてとらえ、それに対し提示する場合である。まとまりとしてとらえたことによつて、その内容を抽象化して受け手に認識させるはたらきも備えている。

3.4 話題が「のだ」文の近くには見つからない

(4) (『それから』四)

(書生の門野が平岡のところから帰ってくる描写があり、その次にそれ以前の話が回想的に語られる。次の引用部分の最初の2段落は、回想部分の最後のところである。)

其時平岡は、早く家を探して落ち付きたいが、あんまり忙しいんで、何うする事も出来ない、たまに宿のものが教へてくれるかと思ふと、まだ人が立ち退かなかつたり、あるひは今壁を塗つてる最中だつたりする。などと、電車へ乗つて分れる迄諸事苦情づくめであつた。代助も氣の毒になつて、そんなら家は、宅の書生に探させやう。なに不景氣だから、大分空いてるのがある筈だ。と請合つて歸つた。

夫から約束通り門野を探しに出した。出すや否や、門野はすぐ恰好なのを見付けて來た。【4】門野に案内をさせて平岡夫婦に見せると、大抵可からうと云ふ事で分れたさうだが、家主の方へ責任もあるし、又其

處が氣に入らなければ外を探す考へもあるからと云ふので、借りるか借りないか判然した所を、門野に、もう一遍確かめさせたのである。

「君、家主の方へは借りるつて、斷つて來たんだらうね」

「え、歸りに寄つて、明日引越すからつて、云つて來ました」

代助は椅子に腰を掛けた儘、新らしく二度の世帯を東京に持つ、夫婦の未来を考へた。平岡は三年前新橋で分れた時とは、もう大分變つてゐる。

【4】では、「門野に案内をさせて～、門野に、もう一遍確かめさせた」という素材を提示している。この提示が何に対してなされたのか、その答は【4】の近くには見つからない。引用の冒頭にこの場面に至るまでの説明を付しておいたが、この場面の前に門野が平岡のところから帰ってくる描写が唐突にあり、【4】の「のだ」文になってはじめて門野が何のために外出し戻つてきたのかがわかるのである。だから、【4】の提示は、書生の門野が平岡のところから帰ってくる描写に対してなされたと考えられる。このようになりに離れた部分に話題がある場合もある。このような場合は、「のだ」文はひとまとまりの内容についての論理的帰結であり、その内容に一段落ついたことの指標になっている。

この用例で注意すべきは、【4】の「のだ」文にだけ提示の素材があるわけではないということである。「のだ」文の前にあるいくつかの文と「のだ」文の素材の部分がひとまとまりの内容をもち、それが話題に対する素材となつていて、そして最後の「のだ」文だけが提示の形式

をとっているのである。

(5) (『それから』一)

(新聞に出ていた「学校騒動」について代助と門野が会話している。)

「へえ、左様なもんですかな」と門野は稍真面目な顔をした。代助はそれぎり黙つて仕舞つた。門野は是より以上通じない男である。是より以上は、いくら行つても、へえ左様なもんですかなで押し通して澄ましてゐる。此方の云ふことが應へるのだから、應へないのだから丸で要領を得ない。【5】代助は、其處が漠然として、刺激が要らなくつて好いと思つて書生に使つてゐるのである。其代り、學校へも行かず、勉強もせず、一日ごろごろ⁽³⁾してゐる。君、ちつと、外國語でも研究しちやどうだなど、云ふ事がある。すると門野は何時でも、左様でせうか、とか、左様なもんでせうか、とか答へる丈である。決して爲ませうといふ事は口にしない。

【5】では、「代助」が「門野」を「其處が漠然として、刺激が要らなくつて好いと思つて書生に使つてゐる」という素材を提示している。何に対して提示しているのか。「代助」ではない。コンテキストからみてここでは代助をあまり問題にしていない。

すでにこの場面の前に門野は登場していて、「門野といふ書生」という表現も既に示されている。そのため、この「のだ」文の話題は〈門野がこの家で書生になっていること〉と規定することができる。〈門野がこの家で書生になっていること〉というのは、〈其處が漠然として、刺激が要らなくつて好いと思つて書生に使つてゐる〉(ということな)のである」という形で

ある。このときに、「門野」が書生であるということが既知でない場合には、前提がまったくちがうので話題もちがったものになる。

この用例の場合には、具体的な事柄や書かれた内容ではなく物語世界の状況が、「のだ」文の話題になっている。しかし、状況といつても〈門野がこの家で書生になっていること〉という既に知らされている物語上の設定の状況を話題にしているのであり、具体的状態を想定できる。そういう点で【4】の用例に近いものであり、この後に述べる3.7のように話題がそれまでの内容に全くない場合とは違う。

3.5 話題が「のだ」文の内部にある

(6) (『青年』弐)

二階の八疊である。東に向いてゐる、西洋風の硝子窓二つから、形紙を張つた向側の壁まで一ぱいに日が差してゐる。この袖浦館といふ下宿は、支那學生なんぞを目當にして建てたものらしい。【6】此部屋は近頃まで印度學生が二人住まつて、籐の長椅子の上にごろごろしてゐたのである。その時廉い羅氈の敷いてあつた床に、今は疊が敷いてあるが、南の窓の下には記念の長椅子が置いてある。

【6】では、「此部屋」に「近頃まで印度學生が二人住まつて、籐の長椅子の上にごろごろしてゐた」という素材が提示されている。「この部屋」は「ごろごろしていた」の主体ではなく、二格あるいはデ格であるものが主題になり「ハ」が後接したものと考えられる。また、文脈の流れからみると、ここで話題になっているのは「下宿」の〈この部屋〉である。このようなことから、この「のだ」文は〈この部屋〉につい

て受け手に認識させる文と考えられる。この【6】の「のだ」文の場合は、話題になる文や具体的表現というものはそれ以前にはなくこの文の内部にあり、コンテキストの支配を受けてはいるが、「のだ」文の一文で内容が完結している。しかし、「のだ」文の内部に話題がある文でも、その話題となる表現に指示語がある場合は、それ以前の指示語の指示している部分が話題であると考えられることもあり、一律には扱えない。【1】の場合がそれである。

ところで、仮に前の場面に印度学生が使った部屋の様子などが描かれていれば、この文の性質もおのずと変わってくるので、その文だけで話題を判断することはできない。

3.6 話題が文章中にはない

(7) (『青年』二十三)

「まあ忘れつぼくて入らつしやることね。晩にお遊びに入らつしやいな。」言ひ棄てて、夫人が歩き出すと、それまで二王立に立つて、巨人が小人島の人間を見るやうに、純一を見てゐた岡村畫伯は、「晩に来給へ」と、訶響のように同じ事を言つて、夫人の跡に續いた。

純一は暫く二人を見送つてゐた。【7】その間店の上さんが吊銭を手に載せて、板縁に膝を衝いて待つてゐたのである。純一はそれに気が附いて、小さい銀貨に大きい銅貨の交つたのを慌てて受け取つて、鱈皮の蝦蟇口にしまつて店を出た。

【7】では、「その間店の上さんが吊銭を手に載せて、板縁に膝を衝いて待つてゐた」という素材を提示している。しかし、何に対しての提示なのか、テキストの中からは想定できない。

ここでは純一のおかれたその場の状況が話題だと考えられる。このように具体的な事象が想定できない用例は多くはない。

3.7 伝聞

(8) (『それから』八)

「あら、そんな事を」と三千代はすぐ打ち消す様に云つた。「それこそ大變よ。貴方」

代助は平岡の今苦しめられてゐるのも其起りは、性質の悪い金を借り始めたのが轉々して崇つてゐるんだと云ふ事を聞いた。【8】平岡は、あの地で、最初のうちは、非常な勤勉家として通つてゐたのだが、三千代が産後心臓が悪くなつて、ぶらぶらし出すと、遊び始めたのである。それも最初のうちは、夫程烈しくもなかつたので、三千代はたゞ交際上已を得ないんだらうと諦めてゐたが、仕舞にはそれが段々高じて、ほうづが無くなる許なので三千代も心配をする。すれば身體が悪くなる。なれば放蕩が猶募る。不親切なんぢやない。私が悪いんですと三千代はわざわざ斷つた

【8】の「のだ」文は、三千代の直接話した内容の要約である。このように伝聞内容を表現するときに「のだ」文が使われることがある。【8】では、「平岡」が「あの地で、最初のうちは、非常な勤勉家として通つてゐたのだが、三千代が産後心臓が悪くなつて、ぶらぶらし出すと、遊び始めた」という素材を提示している。ここでの話題は〈聞いた話〉あるいは〈三千代の言うこと〉である。この用例の場合は「三千代」の言葉を模したとも考えられるが、そうでない場合でも伝聞は「のだ」文で表現されるこ

とが多い。伝聞情報を描写するときに区切りのいいところで「のだ」文となるのである。

4. 共起関係と指標

「のだ」文と共起してよく使われる表現があるが、それらの表現に注目して分析を試みたい。

4.1 「しかし」

(9) (『道草』五十一)

長時間彼女の傍に坐つて、心配さうに其顔を見詰めて居る健三に、何よりも有難い其眠りが、静かに彼女の臉の上に落ちた時、彼は天から降る甘露をまのあたり見るやうな気が常にした。然し其眠りがまた餘り長く續き過ぎると、今度は自分の視線から隠された彼女の眼が却つて不安の種になつた。つひに睫毛の鎖してゐる奥を見るために、彼は正體なく寐入つた細君を、態々揺り起して見る事が折々あつた。細君がもつと寝かして置いて呉れ、ば好いのにといふ訴へを疲れた顔色に現はして重い臉を開くと、彼は其時始めて後悔した。【9】然し彼の神經は斯んな氣の毒な眞似をして迄も、彼女の實在を確めなければ承知しなかつたのである。

やがて彼は寐衣を着換へて、自分の床に入つた。さうして濁りながら動いてゐるやうな彼の頭を、静かな夜の支配に任せた。夜は其濁りを清めて呉れるには餘りに暗過ぎた。

【9】では、「彼の神經」が「斯んな氣の毒な眞似をして迄も、彼女の實在を確めなければ承知しなかつた」という素材を提示している。何

に対して提示しているかということ、彼の精神的状態である。つまり、「彼の神經」ということになる。【6】と同様に、「彼の神經」という語は、素材の中に含まれ、「～承知しなかつた」という素材の内容の主体にあたるが、同時に「～承知しなかつたのである」という提示に対する話題となっている。「〈彼の神經〉というものは、〈素材〉(な)のである」という形として理解できる。

この用例のはじめに逆接「然し」があるために、前文はそのまま【9】の「のだ」文の話題になり得ない。そのため、「彼の神經は」という表現が強調され、「のだ」文の話題であることがはっきりする。つまり、逆接のあとの「のだ」文の話題は前文ではありえず、この逆接表現は新しい話題が提示されていることの指標になる。

4.2 「だから」

(10) (『それから』六)

(平岡の妻から借金を頼まれていた代助は、前日兄に借金の件と平岡の仕事の周旋を依頼したが、不調に終っていた。)

代助は、昨日兄と自分の間に起つた問答の結果を、平岡に知らせやうと思つてゐたのだが、此一言を聞いて、暫らく見合わせる事にした。何だか、構へてゐる向ふの體面を、わざと此方から毀損する様な氣がしたからである。其上金の事に付いては平岡からはまだ一言の相談も受けた事もない。【10】だから表向挨拶をする必要もないのである。たゞ、斯うして黙つてゐれば、平岡からは、内心で、冷淡な奴だと悪く思はれるに極つてゐる。けれども今の代助はさう云

ふ非難に對して、殆んど無感覺である。

【10】では、「表向挨拶をする必要もない」という素材を提示している。前文の「其上金の事に付いては平岡からはまだ一言の相談も受けた事もない。」という状態に對しての提示である。「だから」という語があるため、「のだ」文とその前文は、因果関係で結びついていることが明白になっている。「のだ」文は論理的帰結になっており、その論理的帰結の部分を受け手に認識させようという文である。この場合、前文が前提となって「のだ」文があることが明らかである。このように「だから」があることにより、因果関係という論理がはっきりし、「のだ」文の話題が前文にあることもはっきりする。「～わけだ」におきかえても不自然ではない。

4.3 指示語

(11) (『青年』 弐)

大石はちよいと手に取つて名前を読んで、黙つて女中の顔を見た。女中はかう云つた。

「御飯を上がるのだと申しましたら、それでは待つてゐると仰しやつて、下に入らつしやいます。」

大石は黙つて頷いて飯を食ひ始めた。食ひながら座布團の傍にある東京新聞を擴げて、一面の小説を読む。【11】これは自分が書いてゐるのである。社に出てゐるうちに校正は自分でして置いて、これ丈は毎朝一字残さずに讀む。それが非常に早い。それから矢張自分の擔當してゐる附録にざつと目を通す。

【11】では、「自分が書いてゐる」という素材を提示している。話題は「これ」で、「これ」

の指す内容は「一面の小説」である。「これ」は「書いてゐる」の主体でないし、「自分が書いてゐる」の主題とも考えにくい。「自分が書いてゐるのである」の話題である。この用例は「〈これ〉は、〈素材〉のである」という形で、非常に単純化された「のだ」文になっている。「これ」の指す内容はこの例文のような名詞とは限らず、前文までの内容で話題となるものを指す。

「これは」という語は「のだ」文の話題として文頭におかれる場合が多く、その場合は単純で典型的な形の「のだ」文を作る。この用例のように、「これ」の指す内容が具体的な物・事である場合は、挿入的説明になる。

5. おわりに

「のだ」文より前にある部分を話題にしている「のだ」文は、その前の部分を別の角度から言い換えるような文が多くなる。意味的機能としては、前の部分の事情説明になっている場合が多い。このような場合、語りは説明的で話題の内容が詳しくなっている。前の部分に對してさらに別な情報を付加しているからである。このとき、前の部分の一部の物・事を話題にした「のだ」文は、言い換えや事情説明というよりはその物・事についての解説で、挿入・付け加えということになり、ストーリーや状態描写の展開を一時保留することになる。それに対し、「のだ」文の内部に話題がある場合は、文章の流れからみるとやや唐突な感じを与える。これは、話題が事前にないまま、「のだ」文になって新たな話題ができていたためだと考えられる。文章によっては、そこで文章の流れが変わる場合もある。

また、話題にあたる部分の範囲が広い場合は、「のだ」文はその話題の内容を抽象的に表すことにもなる。話題が「のだ」文から離れた位置にある場合は、「のだ」文がそれまでのひとまとまりの内容の論理的帰結になっていて、そこで内容が切れる指標になっている。このように多くの文が関係して「のだ」文に至る場合は、内容のまとまりや帰結を表すことにもなっている。

今まで見てきたところから、話題の性質の違いによって、「のだ」文の文章中での働きが異なってくることがわかった。

調査した漱石作品の「のだ」文全140例中、前の文が話題になっているもの77例、挿入18例、複数の文が話題になっているもの13例、離れた位置にある話題に対して「のだ」文とその前のいくつかの文で素材を提示しているもの30例、伝聞情報2例であった。「のだ」文の内部に話題があるもの、状況を話題としているものは確認できなかった。

調査した『青年』の「のだ」文全168例中、前の文が話題になっているもの80例、挿入6例、複数の文が話題になっているもの16例、離れた位置にある話題に対して「のだ」文とその前のいくつかの文で素材を提示しているもの4例、伝聞情報14例、「のだ」文の内部に話題があるもの37例、状況を話題としているもの11例であった。複数の文が話題になっている場合の、その話題にあたる複数の文というのは、多くが作中人物の会話である。会話に対して、「のだ」文で提示し抽象化するのである。

『青年』では、会話に関するもの以外で複数の文に関わる「のだ」文は少なく、あっても話題と「のだ」文はあまり離れていない。また、

「のだ」文の内部に話題があるものが比較的多く存在し、その場の状況を話題とする用例も何例かある。このところから、『青年』の「のだ」文は、内容の帰結部分で用いられることが少なく、直前の内容に対する説明として働くことやその「のだ」文の内容自体を強調する傾向があるといえる。つまり、文章の流れを重視するのではなく、比較的狭い範囲を対象にして簡潔に強調し説明したいときに使われる傾向にあるのである。それに対して、漱石作品は、「のだ」文以前に必ず話題があり、なおかつその話題が何なのかがわかりやすいものが多い。論理的帰結として用いられることもあり、「のだ」文についてだけいえば論理的で明解な場合が多い。文章の流れを重視して滞らせないような文体に寄与していると考えられる。また、『青年』に比べて「のだ」文が少ないが、「のだ」文によって受け手に強調して認識させることが少ないといえる。

漱石作品の中でも、作品による傾向の違いも多少見られた。『それから』、『道草』の「のだ」文は、基調となるストーリーから離れたエピソード・解説部分に用いられることが多い。特に『それから』という作品は、エピソード・解説が挿入されることが多く、そのような部分で「のだ」文が使われることが多いのである。やはり、認識させようという意識がはたらく「のだ」文は、解説としてはたらくことが多いからであろう。また、『それから』では、挿入されるエピソード・解説が多いが、その場合、〈離れた位置にある話題に対して「のだ」文とその前のいくつかの文で素材を提示している用例〉を使って、元のストーリーに復帰するということが目立った。

それに比して、『三四郎』での「のだ」文は、エピソード・解説部分での使用がない。これは、『三四郎』という作品にそもそもエピソード・解説部分が少ないことが原因していると思われる。『三四郎』に「のだ」文が少ないことの一因もそこにあるだろう。

- 注(1) 「局外の語り手」とは、ここでは自分の語る物語内容の物語世界に存在しない語り手を指す。
- (2) 「認識させよう」という言いかたは、野田春美(1997) p.100による。
- (3) 原文では繰り返し符号が使われているが、本稿が横書きであるため、符号を使わず繰り返した。他の用例も同様とした。

参考文献

- 伊土耕平(1999)「『陳述の連鎖』について—『裸の王様』と『1973年のピンボール』—」『表現研究』69
- 立川和美(2002)「テキストにおける結束構造に関する一考察——文段成立のマーカ―としての「のだ」文の機能——」『文体論研究』48
- 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法Ⅰ—「のだ」の意味と用法—』和泉書院
- 永野賢(1986)『文章論総説』朝倉書店
- 野田春美(1997)『の(だ)の機能』くろしお出版
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 吉田茂晃(1988)「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』15 神戸大学文学部国語国文学会

付記

小稿は、安部能成記念教育基金学術研究助成金を基にした研究成果である。